

## 東洋の古代美術展によせて

## 博山炉について

今回の「東洋の古代美術」展に、『緑釉博山炉』(漢時代、高22.8cm、承盤の径20.6cm.)と『白磁蟠竜博山炉』(隋～唐時代、高38.2cm、承盤の径25.0cm.)とが出陳されますので、ここでは博山炉という中国古代の香炉についてご説明しましょう。

博山炉はほぼ秦漢時代から流行した香炉で、当時の神仙思想を表わす器物です。本来は青銅製で、ここに示す2点のように陶製の遺品もかなり多いのですが、まれには鉄製や玉製のものもあります。この香炉は流行するとともに、あるいは時代の下とともに、いろいろの形態のものが作られるようになりますが、その標準的なかたちは、今回の漢時代の『緑釉博山炉』に見るようなものです。

まず、承盤の中央に支柱で支えられた半球状の火炉があり、その上に円錐状の蓋がのっています。これには山の峯を示す切りこみがほどこされ、頂上部には鳥がとまっています。この蓋部は神仙の住むという博山、一つに蓬萊山を表わし、切りこみからは香煙が立つようになっています。また承盤は海を表わし、ここに湯を入れて湯気をたて、香煙とまざって、蓬萊

緑釉博山炉 漢時代



山にただよう雲霧となるように考えられています。博山炉は小さな器物ですが、神仙の住む理想郷にあこがれる古代人の夢を端的に示してくれます。

一方、『白磁蟠竜博山炉』の方は約600年ほどのちの隋唐時代の美しい白磁です。この時代には仏教が栄えていましたので、火炉は仏像の台座のような蓮華形となり、その蓋には「宝珠唐草」と呼ばれる西域系の文様が重ねて表わされています。また、火炉は双竜がからみあって支えるかたちとなっており、基本的な博山炉と大分ちがった趣きものになっています。器物の支柱に竜をからみつける意匠は初唐ごろに流行したもので、その時代の陶磁器に幾つかの例が見られますが、京都山科の安祥寺には唐から渡来した竜柱の石塔台座が伝わっています。

約600年をへだてて作られた2点の博山炉をくらべると、神仙にあこがれる古代中国人の造形が、外来の宗教や意匠を摂取しつつ、次第に古典芸術の形成へと向かっていったことを、しみじみと感じさせます。(成瀬不二雄)

白磁蟠竜博山炉 隋～唐時代

